

ネパール山村コテンのモノグラフ

——その作成の道標——

稲 葉 昌 幸

ネパール山村コテンのモノグラフ

今回、本学アジア研究所のネパール共同研究の調査地点として二つの村落が選ばれた。その一つは首都カトマンズから北東へ約三五キロメートル、つまりカトマンズからヒマラヤ山脈よりチベット国境に向って入った標高一、一〇〇メートルから一、二〇〇メートルほどの階段畑に囲まれた山村（農業）である。（図表1）
所在地はバグマティ県カブレ郡マハデオスターン村パンチャート・ワード・ナンバー・七・コテン部落という。

もう一つは、カトマンズから南東へ車で約一〇〇キロメートル、インド国境から約三〇キロメートルと隣接している標高一〇〇メートルたらずの低地帯、いわゆるタライ（Terai）にあるバニニアの部落である。（図表1）
所在地は、ジャナカプール県、ダハヌサ郡ナヘンドラ村パンチャート・ワード・ナンバー・一・バニニア部落という。

両村落が今回調査対象として選ばれた主な理由は、第一に予備調査が行なわれていたこと、第二にその結果、

両村落とも、自然、社会、文化の諸条件からみて本調査が可能であるという判断が下されたこと、第三に、両村落とも戸数が五十戸程度の比較的掌握し易い村落構成であること、第四に山村と平野というだけでなく、両村落とも社会的にも文化的にも比較対照し易い条件が具っていること、等であった。

しかし、何んといっても今回のような異国での調査は、現地の受け入れ態勢が大きく調査結果に影響を与えるわけだが、大変幸せなことに、現地では本研究所嘱託であり、ネパール農業関係のベテラン島田輝男氏の全面的な協力が約束されていた。こういった調査で一番頭を悩ます大きな問題の一つが解決されただけでなく、立派な橋頭堡までできあがったわけだ。

ネパールといえば、一般的な知識はそう豊かとはいえない。ヒマラヤ山脈が連なりエベレストがそびえ、シェルパと呼ばれる山岳案内人がいて、世界の屋根と呼ばれるこの一帯の何処かに雪男が生きている(?) そんな秘境めいたところにある小さい王国、そんなイメージが堂々まわりする程度か、あるいは、お釈迦様が生れた国であるとか、鳥葬の国であるとか、第二次大戦、東南アジアで戦った世代なら、あの勇敢なグルカ兵の母国がネパールぐらいのことは知っているかもしれない……大体そんなような印象がネパールなのである。

ネパールは国際社会においても第三世界的な脚光を浴びることもなく、インド、中国という大国間の間にひっそりと息づいているといった感じの国である。

一九七二年八月ネパールの首都カトマンズで出版され“*The Panchayat System in NEPAL*”という一四〇頁ほどの本がある。著者はパンチャート・トレーニング・センターの所長で *Khagendra Nath Sharma* という人が英文で書いたものだが、その序文に「ネパールの一九五〇年までの社会的経済的背景」という章がある。

そこには、

『ネパールは約五五、〇〇〇マイル四方（一マイルは約一、六〇九メートル）の地域がほとんど山岳である。住民は一九六一年には四五六、八〇四人がカトマンズ盆地に住み二、八八一、五八五人がタライ地域すなわち低地に住んでいる。この低い土地が国内のわずかな肥沃な場所であつて、比較的地味のやせた山地や内部タライの約六、〇四九、二七二人に必要な食料を供給した。

ネパール人の九四％が農業に従事し、二％たらずが家内工業に従事している。農業の大部分は原始的な方法で木の鋤や、手だけを使って耕す鋤といった粗末な道具を使って耕作が行われる。明白な結果はエーカー当りの低生産がこのことを示している。

このようにネパール経済の歴史はそのまま農業で生きるための歴史である。そして、以上のことは次にあげるいくつかのケースもまた同じようなことがいえる。

交通運輸とコミュニケーションの問題をとりあげてみても、それはいまだにきびしいものとがあるとB. P. シレステ (B. P. Shrestha) ⁽²⁾ は述べている。

一九五六年のネパール五ヶ年計画の実施に先だつて三九〇マイルの道路（一六二マイルが舗装で二二八マイルが未舗装、五一マイルの狭軌の鉄道、一四マイルのくたびれたロープウェイ、そして三六〇マイルの空路が半ダース足らずの着陸場でわずかに都市と都市とを結んでいるということが、人口約九〇〇万人、二八、七七〇の町村をかかえるこの国の近代的な全交通運輸を代表している。

右の事業はネパールの社会が歴史的にも経済的にも生きるための容易でない努力を耐えぬいてきたことを

示している。

陸に囲まれたこの国の位置は地理的には孤立を強いられた。交通運輸の便利さの欠如は経済的移動の不足を増大した。その結果は定住農民の層が増加する。彼らはそういった知識が全く不足していて、その改革の意欲もなく、宿命論は最高に達し、伝統的な生き方によりかかってしまう。

社会の面についてみれば、ネパールの社会は伝統的に宗教的、法律的承認を得ているいろいろなカーストや種族によって細かく分化されている。社会的ハイアラキーの頂点にはブラーミン⁽³⁾があり、彼らは読み書きの特権を享受し、社会的、宗教的な指導力を行使している。他方、社会的なハイアラキーの末端は社会的にはアウト・カーストであり、実際面でのサービスにもかかわらずアンタッチャブル⁽⁴⁾（不可触賤民）として取扱われた。カーストにおける社会的地位は動かし難く、法律上の保護が与えられる。このようにして、ハイアラキーの上下の社会的移動は⁽⁵⁾法度である。

ブラーミンは自由に経典を読むことができるが、しかし、他の人々、とくにシュドラス（Shudras）は読むことを禁止されていた。信仰において、そのようなことは宗教的な反乱であった。女性はまた、同様経典を読むことは禁じられていた。

近代的な教育施設は、一、一五〇ほどあり、首都や他のわずかな都市で、支配的な有力ファミリーに後援されている大学や数少ない高校をのぞいては、それらの施設の少ないことが目立つ。かくて、ラナ政権の末期までに文盲が九八%をこえ、一般に近代性が欠けてしまった。文盲、迷信、宗教上のタブー、そしてカーストの制約、それに加えて支配層の注意深い監視の眼が平民の日常の室内業務はもとより、それにかかわる

ことに注がれてきた。』

以上はK・N・シャルマ氏の「ネパールにおけるパンチャート・システム」の冒頭の三頁ほどの拙訳紹介である。社会学の分野からみても、文化人類学の側面からとらえても、ネパールはたしかに興味と関心のつきない国である。あれも手がけてみたい、これも調べてみたい、そういった対象が一杯である。

しかし、今回の調査は総合調査としてはじめてであるし、前にもふれたように、予備調査、調査地点、調査期間、それにスタッフ等の制約があり、あれも、これももの許される調査ではない。……となれば、どうしても特殊研究はもう少し先にして、今回の調査研究の基礎となり、手がかりになるようなテーマ設定の方が、よりはば広い効果が期待できるであろうということになる。

そこで「山村コテンとタライのバニアの部落」のモノグラフ⁽⁵⁾(Monograph)の作成を試みようとしたわけだが、今回は特に「山村コンテ」に焦点をしばって、その作成の段どり、お膳だてを検討し今後のモノグラフ作成の道しるべを作ってみようと思う。

まず、モノグラフ作成に必要と思われる項目ならびに調査可能と考えられる事項等について整理し、次の十項目を設定した。

- 一、山村コテン部落の自然的条件、歴史的条件。
- 二、両部落の構造と機能、特にパンチャート・システムとの関係。部落長と部落行政と中央との関連。
- 三、両部落の行政上の施設と略図。
- 四、両部落の人口。

a、人口の推移（五年間ぐらい）

b、人口の変動（戸数と人員）

c、人口の動態（出生、死亡、増減）

d、人口の出入り（出村、帰村による出稼ぎの数、モビリティ）

e、年令別人口

f、職業別人口

g、性別人口

部落構造を知る上で必要

五、両部落の通婚圏

この場合の通婚圏というのは、事実上結婚し合う地域的範囲または出身地の範囲、そして、カースト制の制約と結婚との関係等を意味する。

また、この調査によって、部落と部落との交流、異民族との交流、緊張、社会関係の緊張、社会関係の封鎖性などを併せて調べる。

六、両部落の機能集団

業務別の協同組合的なものの存否、もしそういった機能集団があれば、他にどんな集団があるか、もし何か存在する場合は、その構成、中核、役割について調べる。

七、両部落の共有財産の存否

もしあれば、どんなものか、例えば共有林、牧草地、それにかゝわる入会権（採草、用材等）、そう

いったものとカーストとの関係。特に水利、灌漑（Irrigation）の問題は詳細に。

八、両部落内における異種族の存否

もしあれば、相互の交流、緊張、分布、職業等。

九、近隣集団と血縁集団

両部落とも、この二つの集団のもっている「つながり」の強弱、弛緩等を具体的に、例えば、冠婚葬祭の場合とか、日常の付き合い等を通じて調べる。

十、その他の集団で両部落を特徴づけている集団

あれば、選り出して調べる。例えば「若い衆」の集団（男、女）、宗教的な集団等。

用意した以上の調査項目が全部調査できるとは思わない。しかし、モノグラフを作るとなれば、この十項目ぐらいがどうしても必要となる。したがって今回はできるだけこれらの項目に接近し、もし一つでも各項目の細部に踏み込めれば一応は満足すべきであろうという心づもりをした。

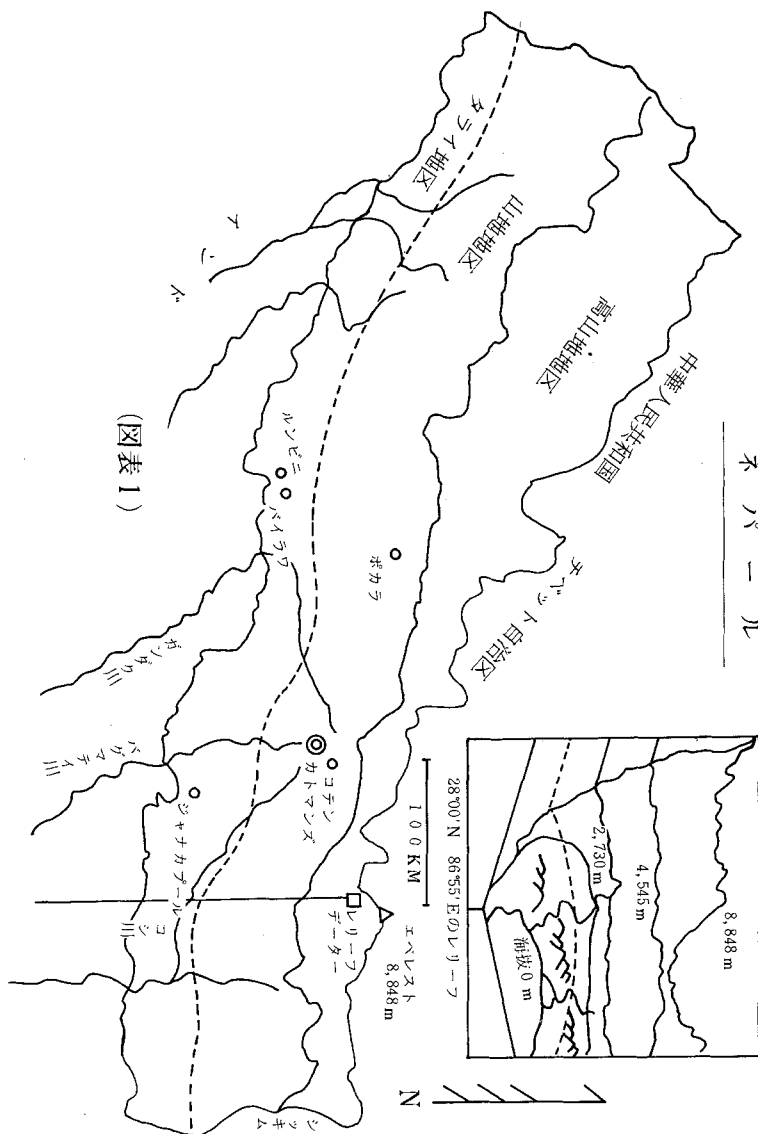
以下調査の結果を調査項目に準拠しながら記述する。

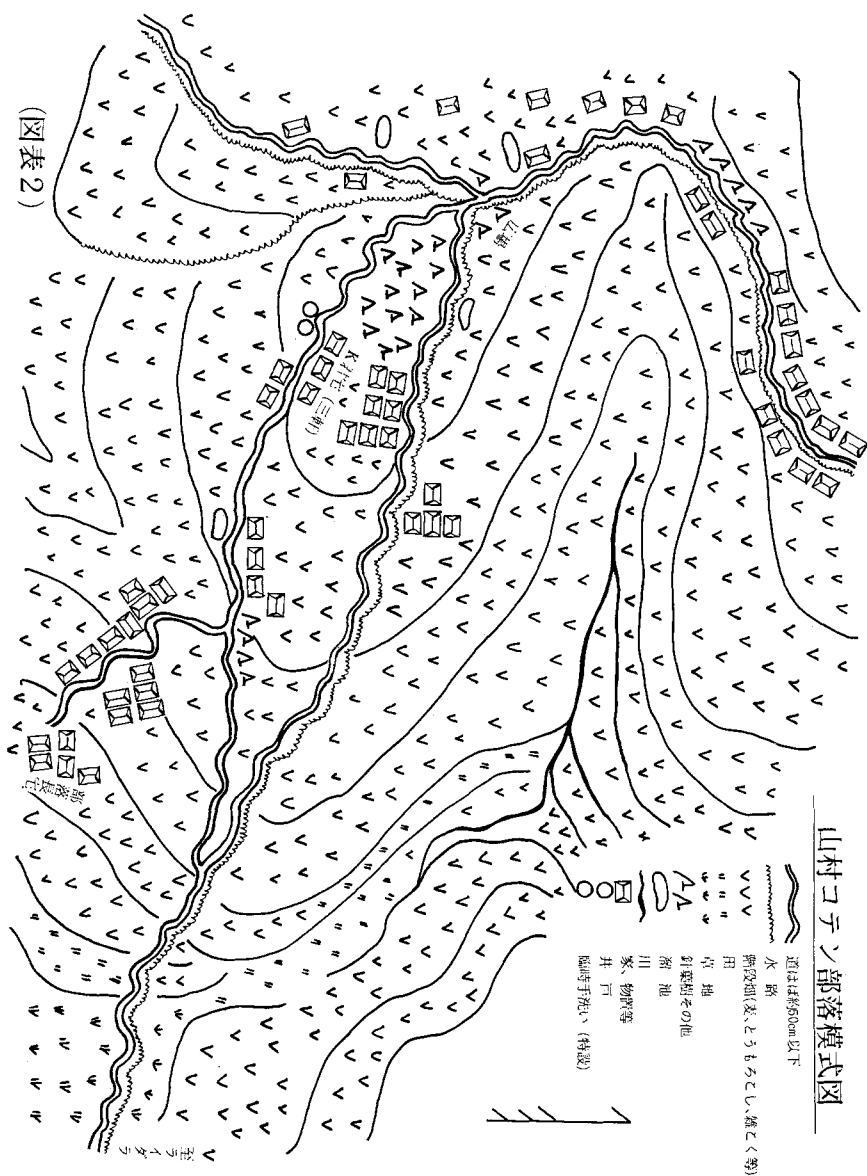
山村コテンの自然

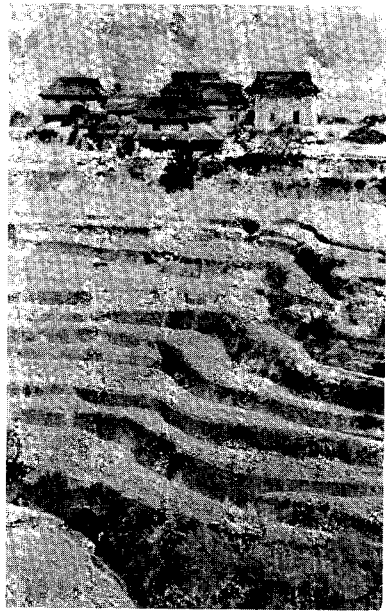
正確な現地地図は手に入らなかった。それにかわるものを随分と探したが見つからなかった。したがって現地を正確に地図で図示できないため、やむなく模式図を使用する。（図表2）

標高一、三二〇メートルのカトマンズから北東へバスで一時間半でライダラに到着、ここが標高四〇〇メートルぐらいといわれていた。そこからまた歩いて約三時間、途中姿羅双樹の林などある比較的傾向のはげしい山や、

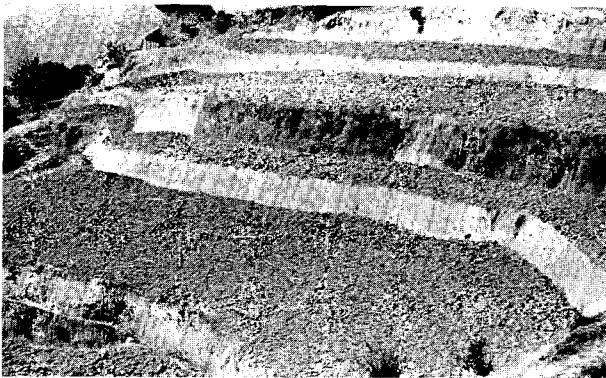
ネパール







耕して天に到るコテンの階段畑
(写真1)

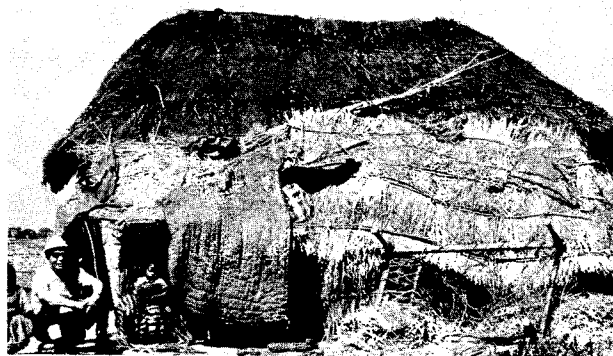


下段から上段へ、外側から内側へスキあげる (写真2)

丘陵状の山で樹木がほとんどない単調な山を五つほど越えると標高一、一〇〇メートルほどのところにコテンの部落は展開されている。『この山の風景は壮観そのものであり「耕して天に到る」とは、まさにネパール山地農業に捧げる言葉である。福田仁志博士（東大名誉教授）によると、この急傾面の階段畑、累々と続く棚田は、粘質な土地と農民の努力とが永年にわたって結びついて出来上ったものであり、その人為の工作物に深い敬意を表わすものである。』⁽⁶⁾ 全くそのとおりだと思う。（写真1・2）

コテン部落はタマン族(TAMANG)の部落である。“PEOPLE OF NEPAL” by Dor BAHADUR BISTA (田村真知子訳) 一〇九頁—一一九頁によれば『タマン族はカトマンズ盆地をぐるりと囲んでいる高い丘陵地帯に住んでいる。—中略—ネパールのチベット・ビルマ語族のなかでもタマン族は大きな集団を形成しており、自分達の起源はチベットであると考えている。しかしタマン族がヒマラヤの南面にいつごろから住みついたのかは全く不明である。元来、彼らはひとまとめにしてボテ(Phote チベット人)と呼ばれていたが、昔は馬商人だったのでタマンと呼ばれるようになったと伝えられている。チベット語でタ(ཐ་)は馬、マン(Mang)は商人を意味する。現在はタマンという名称だけが残っているが、タマン族にとってそれはよいことであった。ネパール語の中で「ボテ」という単語は、非常に不愉快なそして相手を傷つける言葉として使われている。

今日タマン族の人口がどのくらいなのか明確な数字はないが、一九六一年に実施された国勢調査からある程度の人口と地域分布を知ることができる。記録されたタマン人口は五一八、八一二人で、そのうちの半数近くがカトマンズ盆地の東の丘陵地帯で、約二〇、〇〇〇がタライで、そして、二三、〇〇〇強がカトマンズ盆地で記録されたものである。盆地を囲む丘陵地帯の外傾にあるバグマティ・ゾーン、ジャナカプール・ゾーン、ナラヤニ



貧しい小作農の家と家族（写真3）



一階は山羊二階は人間（写真4）

・ゾーンの丘陵地帯がちょうどタマン分布地域の中で東の部分にあたる。——中略——

タマン族の村や畑は海拔一、五〇〇メートルから二、〇〇〇メートル位の、かなり乾燥した高所にある。もっと標高の高いところに住む者もいるし、反対に昔からの高所の居住地をすてて低地のタライやラプティ (Rapti) 盆地に住みついた者もいる。

古いタマンの集落は家々が密集し、道は石畳になっている。家の造りはしっかりした二階建てで、壁は切石を積み、屋根は板ぶきで、中にはスレート屋根の家もみられる。二階を穀物や家財の貯蔵室とし、一階を台所居間、寝室にして使うのが通例で、二階にはバルコニーがあり、その下が玄関先のベランダになっており、ここは居間と同じ使い方がされている。——中略——

昔からのタマン地帯ではない所に住んでいるタマンは非常に貧しい暮らしをしていることが多く、彼らの耕作地は荒地で十分な収穫をあげることができず、カトマンズや方々の村や町で荷運び人夫、家僕、ラバ追い、馬丁などの仕事で賃稼ぎをしなければならぬ。他民族の間で農業に従事する者は小作農で貧しく、粗末な草ぶきの家にしか住めない。(写真3)

高地に住むタマン族の主作物はトウモロコシ、ヒエ、小麦、ソバ、ジャガイモで、低地の暖かく雨の多いところでは水稲もつくる。(写真4) 家畜は牛、水牛、ニワトリ等を飼っている。食糧は自分の畠でとれるものでまかなう。麦とソバを五月から七月にかけて、ジャガイモは八月から十月にヒエ、トウモロコシ、米を十一月から四月にかけて食べる。水牛の肉、ニンニク、イラクサ科の植物そしてアマガエル (Pala といって森にいる) は屋内では禁止されているが、戸外や他家で料理したのであれば食べてもかまわない。——中略——タマンの文化、芸術、宗教はチ

ベット起源のものがほとんどではあるが、チベットのものをそのまま保持してきたのではない。また、伝統的なタマン地帯以外に住むタマンはもとの文化、芸術あるいは宗教をもほとんどすててしまい、直接隣り合っている文化様式をとりいれている。

民族集団としてのタマン族は、タテ割りにいくつかのサブグループに分れていて、そのサブグループをタル（*Tal*）^きといい、ひとつひとつ名前がついている。——中略——

結婚には三つの基本型がある。アレنجメントによる結婚、掠奪誘拐婚をして二人の合意に基づく結婚である。息子や娘の結婚相手を親が決めてやるのは、ほんのひとにぎりの裕福な家のみで、そういう場合は年も十四才か十五才で結婚する。二人を結婚させることで話がまとまると、男側の父親が花ムコとなる息子を伴って、女側の親元へ花ヨメとなる娘を迎えに行く。この時四〇〜五〇人一緒にいていき、花ヨメを実際の婚礼の行われる花ムコの家へ連れてくる。式の席上では家族と親族の中で二人より年上のものが一人一人二人の額にティカをつけてやる。米飯と羊や水牛の肉それに大量の酒で近所の人々や親族をもてなす。

目当ての娘が結婚に簡単には同意しそうな場合や、アレنجメント結婚の長々しい手続きと出費を逃れたという時取るのが、娘をさらってくるという手段である。トラブルと時間と出費をさけるために、望ましい結婚とされているクロスカズン婚でさえ、この方法をとることがある。さらわれた娘が三日間頑強に結婚を拒みつづけると、彼女は親元へ帰される。結婚を承知すると、相応の婚礼をし、娘の両親や親族や友人達を招待する。縁日や市場に出かけた折にさらわれる娘が多い。娘の親が本当に怒ってしまうと、さらった男の家に賠償金の支払いを要求する。それで納得すればあとの手続きはたいていスムーズに済んでしまう。

若者達の多くが双方合意の上で結婚する。若い男女が相愛の中になって結婚を決意すると、男の方が自分の両親にたのんで、娘の親の承諾をとりつけてもらう。承諾が得られれば、アレンジメント結婚と同じやり方で婚礼の準備をする。もし、どちらか一方の親が二人の結婚に承知しないということになると、承知してくれるまでか、二人を全く無視するようになるまで、墮落ちしてどこかにかくれているほかはない。——中略——

タマンの宗教は一応仏教ということになっている。大きな村にはギャン (gyang) といって仏教の寺がある。寺にまつられている神々や宗教画は、全てシェルパ族の間でみられるのと同じ形式であり、経典は全てチベット文字で書かれている。ギャンで行われる祝祭や宗教行事のいくつかは、シェルパやその他の北部国境地帯の人々のそれと同じ純仏教形式をとっている。タマンのラムはこういうラマ教的仏教的宗教儀式を行うなかで養成され、公けの司祭として様々な儀礼や葬式をとり行う。——中略——

村の社会活動のリーダーはムルミ (murmi) という。ムルミは一定のメンバーによって毎年選出される場合と、その地位が世襲されていく場合とがあるが、どちらも地方の行政管庁から承認をもらう。公けには地母神の祭「プミ・プジャ」の日に村民が新ムルミを任命することになっている。ムルミは徴税官の代理として村民から地税を集め、その地方の税務省へ納める。——中略——

タマン族がひどい搾取を受けてきたということは、なんといっても不幸であった。それでも少数ではあるが、子供達を政府設置の無料小学校に通わせている者もいるし、政治に関心を持つ者も出てきたようである。』

以上はタマン族を知るうえでハンディな、しかも貴重な論文だと思うので、全頁を紹介したいと思ったが、紙面の都合もあって、ダイジェストで掲載させていただいた。

いよいよタマン族の部落コテンに入ることになった。文字どおり羊腸の小路をたどること三時間余、眼前にひらけたコテンの部落は、いわゆる日本の山村とはそのイメージが全く違ふといつてよい。(図表2)(写真1・2)

まっ赤な土の塊でできている階段というような印象である。大体樹木が目に入らない(もちろん樹木はあるのだが……)、集落がつかめない。ただ赤い土の大きな塊の階段の間にパラパラと家が見えがくれする……といった感じである。階段畑に青いものがない……そんな畑がウネウネと横にのびているのである。つまり階段は「縦」に連なる……どちらかといえば、垂直を連想するものだが、ここの階段畑は「横隊」を組んでいる。この強烈な印象の謎は現地ではうまく解けなかったが、その後、川喜田二郎氏の『日本文化探検⁽¹⁾」の中に出てくる「山と谷の生態」の章を読んでいたら、この疑問は解けた。縁があつて、私はヒマラヤの山岳国ネパールを二度訪れることができた。この国のヒマラヤ主嶺とインド平野との間には、日本をさながら思い起こさせる山岳丘陵地帯がある。迷路のように入り乱れる丘地と、その間に散在する猫の額のような谷底の平地。そこには村々が沢山散在し、畑がある。谷底や凹形の斜面には、みごとな階段上の水田もある。そのため、日本人には一見親近感を覚えさせる。にもかかわらず、どこかに違いを感じさせられるのである。ちがいはつまりこうであつた。日本の村は谷間にあるのに、むこうは丘の上に多い。そこで、いきおい村に近い丘上の耕地に力こぶを入れる。そこは水利が利かないから、畑作が重点になる。畑作に重点をかけると、肥沃度を維持する上から、日本よりも畜産に力を注がねばならない。事実かれらはその通りである。日本人が驚くような斜面まで無数の階段畑地があるが、そんなところまで、畜産の余徳で二頭びきの牛で犁く。だから水田の階段とちがつて、段と段との間は横に平らな網目状につながっている(写真1・2)。さもないと、下の段から上の段へ移るたびに、スキをかついで牛を追ひ上げな

ければならない。その労力の損耗を防ぐ意味がある（彼らは下段から上段へ、そして同じ段の中では外側から内傾へ型く）。丘山に陣取る結果、村境は日本のように尾根筋でなく、むしろ谷間の水流沿いになっている。だから水田を作るところは村から遠い村境になる。村の近くの畑では裏作もするが、谷間の水田は一毛作である。――中略――

ころろみに、最も伝統的な、最も標準的な日本の村を思い浮べよう。村は谷に近く、あるいは山間盆地、あるいは山麓線にある。広い意味で「谷」にある。村に近く、つまり谷間に、集約的な水田が作られる。水田は山から流れ出す谷川で灌漑されたものであり、壮大な河川と運河網でうるおされたものではなかった。そして村の背後には山がある。林野がある。森林は谷水を豊富にし、水田を早魃から守った。それはまた洪水の調節器であった。森林はスギ・ヒノキ・マツのような用材を豊かに提供し、木造建築を発達させた。それはまた薪炭を提供した。その上に林野は、水田や畑地に型きこむ刈り敷きの草や堆肥を供給した。――中略――

まっ赤な土の「横隊」を組んだ階段畑には、日本のような林野と水田の山谷村の生態学は通用しないのである。ましてや「山の神」と「田の神」の「交流」というか「変身」というか、そういったものはここにはミジンもない。とすれば標準的な日本の山村の生活様式＝文化の「尺度」が通用するはずがないのである。

いよいよ調査地タマン族の部落、山村コテンに入った。そして、その自然の概況、特に住宅の散集の模様、部落の面積、それに調査項目と調査の時間、それらのタイミングを計り、村落の模式図、記録メモ、カセットの録音等は主として、同行の大学院生菊島・大和谷両君に、写真は広告室の加藤氏に分担をお願いし、インタビューによる質疑応答と観察記録を私が行った。したがって、最初用意した調査項目は大はばに変更を加えた。

部落構成員

約二三〇名。男女性別の数詳細、集計できず。

家族数

「一生活単位」を「一家族」として五四家族。ただし、これも明確ではない。「戸籍が無い」ため、戸籍上から、家族数を算出することも不可能であり、面接による応答だけで集計した。

K家の家族数の例――一家族計二三名。K家の主人の母――一人・おじ夫婦――二人・おじ夫婦の子供――二人、ただし一人は結婚してK家に同居・身よりのないおば（親戚）――一人・主人の弟夫婦二組――四人、その子供それぞれ三人と一人がいるので、子供四人・主人の弟夫婦（死亡）の子供二人（男女）・それにK家の主人夫婦と子供四人で六名、この家族構成を、「夫婦と未婚の子供を一単位とした」単位家族で線びきしてみると。K君夫婦とその四人の子供、それに母親が一ブロックの直系家族を構成するが、ただこの場合、K君の弟夫婦（死亡）の子供二人（未成年）を引きとっているわけだから、K君の家族はそれだけで純直系家族というより準複合家族といえよう。それに、弟夫婦と子供達が二家族いるが、これは明らかにそれぞれ単位家族である。その他、おじ夫婦の二組のうち一組は二世代が同居しているわけだから、直系家族一の単位家族¹ということになり、親戚のおばは一人だが、それも単位家族一の中に入れるとする。

このK君一家二三名の家族構成は、準複合（または直系一・直系一・単位家族四の六ブロックに線びきのできる複合家族ということになる。日本では最近見出すことのできない構成といえよう。それから、この調査で注意することは、「家族の基準」を統一することである。特にこの例のように六ブロックで構成されて

家督の相続

いる家族が、三軒の家に住んでいて、それが一家をなしているというような、複雑な構成の場合は「家族」は多少大づかみなところがあるにしても、前にのべたように「生活単位」でとおした方がよいと思う。ただし、調査の内容にもよるので、この線びきの方法には拘束力はない。他の方法を使う場合は、戸籍がないし、幼児は「数に入っていない」などの話もきくので、注意が必要だろう。それと、もっと大切なことは「親族呼称」が複雑だということである。おじ、おばが、ちち、ははと混同されて使用されるし、いとこが兄弟と同じ言葉で使われている。もちろん正確に聴きだせば、本当の父か母か、兄弟かは判るし、また、そういう言葉も立派にあるわけだが、「慣行」として使われる言葉（親族呼称）には注意が必要である。

原則として長男（成年になった）全責任を負う。長男に何か事情があれば、長男に代る。男子、例えば長男の弟という原則をふむ。調査対象になったK家では収入も、支出も全部長男を通して行われる仕組みになっていたし、長男が所用のため一年ほど家を留守にした時は、長男の弟が、その間に長男の代行をした。なお、不動産の授受については、不動産の登記そのものが「ない」という返事なので、法律上の授受の方法は不明。

結婚の方法

この部落では親が見つける（カーストを異にする場合は原則として不可）、双方の合意、この場合はいわゆる恋愛結婚も含まれる。結婚の年令は十数年前までは、随分若く結婚したが、それが男一八歳、女一六歳になり、昨年から男二一歳、女一八歳になったという。

部落長

この部落の場合ブラダンパンツと呼ばれ、同部落の選挙によって選出される。二、四、六年とあるが、同部落は四年が任期である。部落長はパンチャート⁽⁸⁾の仕事の手助けのようなこともあるし、また村役場の補助機関的な仕事もさせられる。しかし、主たる任務は部落内の「世話役」、「とりまとめ役」、「幹事役」的な性格と役割が強く、いわゆるカリスマ的存在ではない。

カースト制

現在 Tamang (土着の民) ・ Bahun (僧侶) ・ Kami (かじや職人) ・ Damai (仕立職人) の四つのカースト⁽⁹⁾があり、そのおののカーストがまた、いくつかのカーストに分れている。どのくらいに分れているか質問してもよくは判らない。そして、そのカーストが、このコテンの部落でどんな歴史的変遷(化)をとげたかも判らない。ただ、グループ・インタビューの質問ででてくるのは、ずっと昔ということであり、どのくらい昔か、三〇〇年もっと前四〇〇年ぐらい前とか、余りあてにならない。今日、それらのカーストは、この部落では、それにふさわしい仕事についているわけではない。バウンも、カミイも、ダマイもどの家があるのか、見ても判らないし、聴いても納得できそうにない。しかし、淨、不淨の考え方、食慣習、結婚、交際といったことになると、やはり厳然と区別されているとのことである。今日でも異なるカーストの家の中には入らないで戸外で用事を済ませる。異ったカーストの作ったものは食べない。下のカーストの作った穀物、野菜等は火を通さなければ授受はできるのだそうだ。それを下のカーストが、煮たり焼いたりして手を加えると授受ができなくなる。結婚はカーストの上下とも、異ったカーストとも結婚しないのが普通である。

それを見分けるのは親たちの役目であって、カーストの地位はよく聴いて、確かめるのだそうである。もちろん例外はあるが、その場合は「結婚とはいわない」で、本人同志の「格下げ」か、「子供の格下げ」か、極端な場合はアウト・カースト、またはアンタッチャブル (untouchable) になる。しかし、この部落の場合、そういう例は「ない」との答であった。

学校教育

二五年前までは、コテンの部落では学校教育を受けたものはほとんどいなかった。八年前にこのコテンから約三キロメートルほど離れた丘の上に小じんまりした、しかし立派な学校ができた。(写真5) 小学校と中学校だそう。小学校は一年から三年までが義務教育で無償であり、中学は三年で授業料、教科書代すべて有償になる。コテンから小学校へ現在一八名、中学校へ二名、計二〇名が通学している。この小・中学校は一パンチャヤートに⁽¹⁰⁾大体一つぐらいのことであるから、この地域の一パンチャヤートは九ワード(区)に分かれている。そうすると、コテンの部落ぐらいの大きさの部落、九つに対して小・中学校が大体一校ということになる(コテンから小学校まで子供の足で約三〇分ぐらい)。教員はすべて中央から派遣されてきている。授業の内容はあまりつまびらかでないが、国語と算数という答えはハッキリしていた。始業は朝一〇時、終業は午後四時、給食なし、べん当なし、したがって子供たちは「昼食ぬき」ということになる。家庭の食事でも動物性タンパクの摂取は少く、一般的に肉類は冠婚葬祭のときぐらい、平常は朝食が里芋のようなもので、夕食がトウモロコシ料理(例、ポップコーンに、ダルといって豆をすりつぶして、煮たものに香辛料で味つけする一種のスープ)ぐらいである。したがって、子供たちが昼食ぬきで学校に行っていると、育ちざかりな



陵線上はるかにコテンの小・中学校（写真5）



くったくなく、明るく、人なつこい子どもたち（写真6）

のにどうなることか、学校教育もさることながら、社会教育の方が気になる状態（写真6）ただし、学校に行かない日、家で仕事をしている日は三食が普通だそうである。

部落信仰

グループ・インタビューでは、宗教はヒンズー教とラマ教が大体半分ぐらいであり、それに地方特有の「俗信」が並存しているという結果がでた。個人のインタビューにおいても結果は大体同じである。したがって、この分布状態は、おおむね、コテンの部落の信仰の実情を物語っていると考えてよからう。ただ、一つ二つ気になる点について触れておくと、「俗信」が単なる「俗信」か、あるいはアニミズムかという点と、この部落にはヒンズーの寺院もラマの寺もない。僧侶も定住していない。カーストのバウンはいるが僧侶はいない。ヒンズー、ラマともお寺はここから離れた他の部落、特にバネパにいけばあるらしいが、そこまでは歩いて彼らの足で片道四時間かかる。僧侶も彼らは「何処から来る」という表現をしていたが、どうもあまり熱心な信者たちではなさそうに思える。しかし、葬式の仕方、遺体の焼却の仕方、遺骨・灰の処置の仕方、墓標の立て方、供養の仕方などの話をきくと、まぎれもなくヒンズー教であるし、またラマ教である。「俗信」の方は、最初アニミズム的な面を探ってみたが、どうも靈魂（Ghost Soul）の投影という形よりも祈祷・呪術（Magic）的形態が鮮明で、精神的にも物質的にも現世的な結びつきが強く、明らかに「俗信」と考えられる。ただし、時間がなかったので、もう少しこの問題は煮つめてみないと断定はできない。部落のはずれ、部落の中に明らかに「祠堂」の形態が残っているし、また「供物」を捧げているので、いわゆる「精霊祠堂」か「部落神祠堂」かの、いずれかと思われるが、地元の説明だけでは正確に把握できなかった。

〔キレイ〕と〔キタナイ〕

日本の生活様式の「尺度」が通用しないことについて、前にものべた。これはコテンに限ったことではないが、ネパールの「キレイ」「キタナイ」「清潔」「不潔」「衛生的」「非衛生的」「淨」「不淨」という観念は日本人のそれとは「尺度」が大変違っているように思う。

ネパール全体からみれば、タライ（低地）が魑魅魍魎ちみちりょうの瘴癘しょうれいの地であり、世界保健機構（WHO）が中心となって、マラリア、フィリシア等の疫病の撲滅運動が展開され、一九五八年十二月にネパール・マラリア撲滅機構が創立され、全国的にこれらの疫病は駆逐されたが、その他の悪疾、たとえば、ライ、梅毒、コレラ、チブス等々はたしてどうであろうか……現にコテンに関しても数年前、八人が熱病で一度に死亡したという、しかもその病名は判然としない。明かに、これらの疫病は根強く残存している。しかし、ここでは、衛生学的見地からこれを論じようというのではない。むしろ、彼らの「尺度」にたつて、心理的、文化的、社会的な面からよく考えてみなければならないと思う。例えば、同じ「キタナサ」「不潔さ」「不淨さ」をとらえるにしても、インド系人種、チベット系人種、またその所屬しているカースト、宗教等を度外視して一義的に論じてしまうことは無理であり、危険ですらある。とくに、インド系人種は「キレイ好き」「チベット系人種は「キタナイ好き」などという先入観が入ってくると、ことさら実体を見失いがちになるので留意すべきだと思う。そうはいっても、チベット系の人達が「顔を洗わない」「歯をみがかない」「手を洗わない」「風呂・シャワー」を使わない（身体を洗わない）、衣服の洗濯は一年中しない、着たつきり雀でボロボロになるまで着る。食器類など洗う水が濁っていきたくない。お便所がない（写真7）、紙を使わない、その

ネパール山村コテンのモノグラフ



コテンの特設便所（手前のムシロ囲い）（写真7）



一盛りの土、これが
水利権だ（写真9）



側溝式の水路（写真8）

まま……ということになれば、日本人の「尺度」では「キタナイ」「不潔」「非衛生」という一連の生活の価値体系のカテゴリに組み入れてしまう。

しかし、ネパールでは、これはどうも単純にその生活の中に組み込み得ない体験にしばしば出会う。例えば、その同じ人たちが、食物を作るのに「生」^{なま}ものをいやがり、野菜なども「クタクタ」になるまで煮るのを好み、サットゆがいて調味料を加えてなどという料理は全然駄目である。クタクタに煮るか、パリパリに揚げるか、カリカリに焼くか、とにかく、日本人からみれば徹底した「滅菌法」を採って口に入れるのである。この一見矛盾しているとした考えられない行動の体系は何んであろうか、単に衛生的な見地からだけの解明以外に、もっと生活文化、社会（カースト制を含む）、宗教等と相互に関連して、密着した何にかがあるにちがいない。あるいは、それに、もっと純粹なナチュラルというか、ネーティブというか、そういう「価値観」みたいなものが、例えば「腐るもの」||「ダメ」、「腐らないもの」||「イイ」というような……、何にか、そういった大きな作用が生きているのかもしれない。とにかく未解決の課題であることは間違いない。この問題に関しては「熱帯の集団衛生学」とカースト制の起源を結びつけた假説⁽¹¹⁾すら生れている。

水利

前にも述べたが、日本と違って、水と谷と林の生態学がここでは赤土と丘と階段畑に変わっている。しかし、そこに田畑があれば、水はどうしても必要だ。五月から九月までの雨期はともかく、十月から四月までの乾期には、農耕にいろいろな知恵が動員され、それに適応する農作物⁽¹²⁾がうえられる。しかし水は必要なのである。どういう知恵で、方法でこの山村が水を生活に、農耕にとり入れているのであろうか、そういった素朴

な疑問はコテンの部落のずっと下の方の道路ぞいの一本の溝（写真8）を見つけて説明を求めたとき半ば解決した（図表2）。この側溝が「水路」だったわけだ。しかもその水路には水が無かった。その理由も後で判った。しかもこの水路は遠くはなれた日本の東北、国際ロータリ三四地区（青森・秋田）の善意の援助金で出来たということも知った。

この水路はコテン部落の一番高いところにある水溜池から写真のように側溝式に掘り下って、幾つかの分岐点をつくりながらコテン部落の下まで流れおりるようになっていて、水量も決して多いとはいえないし、監理も一見したところ組織的、合理的、機能的とも思えない。「この水路の監理は誰が、どんな方法で行っているか」という質問に「関係者が相談して監理している」という答えであった。翌朝、他の調査もあって、部落の上手に出かけたとき、そこで、その水路が堰きとめられている場合（写真9）に出くわした。「この場所をこのように堰きめてしまえば、他の一方には全然水が流れないが、それは大丈夫なのか」という質問を現地の人たちにした。ところが、そこで、大変強い反応をあらわし、わめくような強い調子で、説明ではなく、何事か訴えるような、言い争うような口調に変ってきってしまった。通訳者も、そこは通訳せず、ただ、黙ってしまうという状況で、やむなく、カセットに録音はしておいたので、その録音を翻訳することを考え、深くたずねるのをやめて、その質問は打切った。昨日、「関係者が相談して監理する」という返事とは、どうも大変違う雰囲気に見えるので、今日でも未だ気になっている。特に国際ロータリ三四地区メンバーの寄せた心からの善意が、地元で結実しないようでは残念だと思ひ、赤土の乾期の階段畑により多くの実りを与えるかどうかを思えば、この水利の問題は、水利権を含めて、もう少し時間をかけて取組むべき課題だ

と思う。

コテン部落のモノグラフ作成にあたり、残された問題、課題について総括しておきたいと思う。

まず、コテンの場合、部落の歴史がよくつかめなかった。やゝはっきりわかるのは、ここ二、三十年であって、それ以前になるとどうもあいまいである。十五、六年前までは、コテン部落からライダラへ通ずる山道（図表2）（調査隊が登ってきた道）はジャングルにおおわれ、トラの棲息地帯だったという。そして、十五、六年間にジャングルの木はほとんど全部伐り倒され、家屋と薪の材料になったという。しかし、それ以前コテン部落の祖先が、どこから、どのルートを通って、現在地に定住したかということになると、部落長の答ではないが「四〇〇年ぐらい前」ということになる。文字も、文献も、その他の記録も何もないので、今後、山地民族の「移動と定着」の面から検討してみる必要があるように思う。

次にパンチャヤート（Panchayat）であるが、一九六〇年のいわゆる「王様クーデター」以降マヘンドラ国王親政のもとでつくりだした「一種の積み上げる方式による議会制民主主義体制であって、この考え方にもとづいて地方行政区も再編成した」といった程度の理解を持って現地に行ってみると、どうもパンチャヤートにはもつと積極的な国づくりのイデオロギー的なものが認められた。日本でも明治維新のときは明治天皇が維新の号令に「五ヶ條五誓文」を公布し、新生日本の進むべき道をおしめしになった。近くは、インドネシアの前大統領スカルノは「五つの原則」パンチャ・シラ（Pantja Sila）を建国の柱としてインドネシアの独立、建国にまい進した。その前に彼は、「五つの義務」パンチャ・ダルマ（Pantja Dharma）を独立のシンボルにしようとした。

そういえば、日本には律令時代から今日まで、五人組という制度があった。パンチ（Panch）五つをあらわす



青空公民館的広場と水路（写真10）



調査隊のよきヘルパーT.クリシナ君ご夫妻（写真11）

この言葉は、単なる言葉の偶然の符合とはいえないものがあるのかもしれない。それはともかく、「パンチャヤート」は今後学際的にじっくり取組まなければならない課題といえよう。

部落の行政については、施設、設備も含めて、時間ぎれで調査できなかった。公共施設は前述の小中学校以外は全く存置されていない。ただ、何かあると集る「青空公民館」(写真10)ともいえる広場が部落のはずれの小高い平地にあるだけである。

調査項目、四項に挙げた「人口」については、前にも述べたように、戸籍が無いこと等、材料不足と時間ぎれで正確な数を把握することができなかったが、インテンシブに調査すれば、戸数五十戸ぐらいのため、ある程度の人口の推移、変動、動態、人の出入り、年齢別、性別等の人口構成はわかると思う。異種族との接触、交流、それによって生ずる社会関係の弛緩や緊張、封鎖性、文化の変容などは川喜田二郎氏の「マガール族(Magar)¹³⁾の文化変化」の調査などが示すように、ここコテンもこういった視点から調べてみると興味深い結果がでてくるのではなからうか。

古い制度であるカースト制、それに新しいパンチャヤート制、そんな間にあって、コテンの住民はどんな知恵を駆馳して生活しているであろうか。もちろん、近代社会のような、機能的な方法は実行されないにしても、何にか見つけ出せるかも知れないと、ひそかな期待を持っていた。しかしそこには、私たちが期待するようなものはなかった。業種別の組合制度はもちろん、共有財産の共同監理も、前にのべた水路ぐらいのもので、その監理体制もどちらかといえば談合の程度を出ないものである。

部落民相互の人間関係はカースト制の拘束や宗教上の慣習、それに使い古された一般的な慣行等から抜けでる

ことは、なかなかむずかしい。どうしても限られた範囲内での行為にとどまる。例えば農作業、冠婚葬祭にかこつけた人間関係が軸になる。

しかし、そうだからといって、けっして、暗さ、固苦しさは全く見あたらない。むしろ屈託くつとくのない、明るい、カラッとした、美しい顔であり、人なつっこい人情がここにはある。ネパールのごく小さな山村のモノグラフ作成の道標も終りに近づいた。はたして、道標の役目が果せるかどうか？今後モノグラフ作成の作業になにか手がかりを示すことができれば幸いである。

この報告の筆をおくにあたり、大変失礼な方法とは思いましたが遠いネパールの地で、われわれ調査隊のためにかたならぬご協力を賜わり、大変親切にして下された現地で活躍中の島田輝男氏をはじめ多くの日本人の方々ならびに、ネパールの方々に心からお礼を申し上げます。

とりわけ、本調査に最初から同伴下され、自宅をわれわれの宿舎に提供し、ガイド役をつとめ、通訳をし、隊員へのこまごました注意から、食事の仕度まで気を配って親身も及ばぬご協力をして下されたタマン・クリシナ君ならびに奥様、そして同君のご一家に対して心からなる感謝の意をあらわすとともに、泊めていただいた同家の二階家の前庭のお二人の写真(写真II)を掲載し、今後とも変らぬご活躍とお幸せをお祈り申し上げます。

注

- (1) 付記「The Panchayat System in NEPAL」の訳文参照。なお Panch は数字の五、または五つの委員会を意味し、
jat は caste を意味する。Panchayat is a committee (council) of five。

- (2) B. P. Shrestha, *The Economy of Nepal 1967-1971*からの抜粋。
- (3) 承認された伝統としてネパール社会には四つのカースト、ブラーミン (Brahmins)、チェットリー (chhetris)、バイシヤス (Vaisiyas) それにシュドラス (Shudras) と三六のサブカーストがある。前掲四頁。
- (4) アンタタッチャブル (untouchable) は主として掃除人、靴屋、かじや、それに金細工職人が含まれる。前掲四頁。
- (5) この場合モノグラフ (Monograph) とは、一つの社会的単位、例えば、個人、家族、集団、制度、コミュニティ等の全ての生活過程とか、または或る側面とかに関して、詳細な資料を蒐集し、記述したものをいう。そしてこのモノグラフを作ることによって、そこにはたらいっているいろいろな要因の相互関係を明確にする。どうしても研究者自身の直接的な観察や、聴取や面接が主となり、また、パーソナル・ドキュメント、古文書などが使用される場合が多い。したがって、主観的な要素が入り易いが、統計的方法とか、心理学的成果、例えばTAT、ロールシャッハ・テストなどを併用して相補いつつ用いる。事例研究の一つ。
- (6) 本学「アジア研究所記要」第二号、三〇四頁。
- (7) 「日本文化探検」川喜田二郎著 (講談社) 六一頁―六三頁。
- (8) 付記「The Panchayat System in NEPAL」の村落パンチャートの項訳文参照。
- (9) (注3)(注4)の項参照。
- (10) 付記、パンチャートとワールドの項参照。
- (11) カーストの起源——清潔感をめぐる日本文化の座標、前掲(注7)参照。
- (12) 本学「アジア研究所記要」第二号の一九三―一九九頁にわたり島田輝男氏が発表している。

(13) 「民族学研究」三十二巻四号、川喜田二郎氏の「マガル族 (Magar) の文化変化」。

付記

ネパールの農村の調査に際して、直接その対象となつたわけではないが、最初からパンチャヤート (Panchayat)、パンチャヤートと、ずい分と聴かされた。正直いって正確な知識がなかったので、だいたい現地で理解するのに難儀した。帰ってきてから、向うの本を訳し読みしてみたが、本文の中で紹介しておいた「The Panchayat System in NEPAL」 by Khagendra Nath Sharma 氏の第五章に、The Panchayat System、というパンチャヤートの構成等について論じたところがあるので、その章だけ抄訳してパンチャヤートとはどんな制度か紹介してみよう。

まず、知っていて欲しいことは、国王は一九六〇年の十二月十六日の布告で議会制を一時停止した。一九六一年の一月五日、国王は次のような布告を発した。国の行政や経済に国民が直接参加することは、パンチャヤートを通じて国民からじかに湧きでたものであつてこそ堅固なのである。つまり、※「草の根」の参加に意義があるのである。

この国民の「草の根」参加の概念は、旧いパンチャヤートの自然の成りゆきでできあがつたものではない。これはむしろデモクラシー参加の新しい概念であり、Panch jat という術語と一致する。パンチャヤートの機構、システムは一九六二年の十二月十六日から「ネパールの憲法」と呼ばれるようになった。

以下、パンチャヤートの機構について簡単にのべてみよう。

パンチャヤートの構造

パンチャヤートは村落 (Village) を起点とした国家レベルまでの国民審議の四段階の階層 (hierarchy) である。パンチャヤートの基本的な単位は村落である。約二、〇〇〇名の人口をもっているすべての農村地域は村落パンチャヤートの地域である。

それらの地域の全成人は村落会議を構成し、そして村落会議は年二回会合し、その村落パンチャヤートで行われる業務を検討し、新しいプログラムと原資を決定する。

全地域は九区分以上のワード (Wards) に区分されている。そして、それぞれのワードは、パンチャまたはパンチャヤートメンバーとして知られている代表一名を選出する。

そして、これら九名のパンチャと、それに一名のチーフ・パンチャ、一名の副チーフ・パンチャが村落パンチャヤート (Village Panchayat) を構成する。

チーフ・パンチャならびに副パンチャは任期二年で選出される。(一九六九年八月の改正で、この項は四年に延長された。)

彼らは全村落会議によって選出される。選挙は無記名投票の一人一票が原則である。

パンチャヤート・メンバー (パンチャ) はそれぞれのワードの有権者によって選ばれ、任期は六年である。メンバー (パンチャ) の三分の一は二年ごとに改選される。

チーフと副チーフ・パンチャは投票数の絶対多数を獲得しなければならない。

他のメンバーは単純多数が原則である。

村落パンチャヤートは一ヶ月に一回開かれるが、もし必要と考えられるなら何回でも開かれる。

村落パンチャヤートはその活動と実行のための事務官と他の人事を決定できる。

パンチャヤートは土地改革のプログラムの最終段階をむかえるにいたった。

政府は、それぞれ事務官を任命した。

村落パンチャヤートは村落会議の実行機関である。そして、その責任を負っている機関である。

村落会議は三分の二の多数でチーフ、副チーフ・パンチャを変更することができる。

メンバー（パンチャ）は、それぞれのワード有権者の三分の二の不信任投票で変更できる。

議席に欠員のある場合の選挙は出ていった人の任期の残りについて行われる。

成人市民は如何なる村落パンチャヤート地域の議席の選挙にも立候補できる。

村落パンチャヤートはメンバー一名を選び、村落パンチャヤートと地域パンチャヤートの間をつなぐリンクの

働きをする地域会議のメンバーを選ぶ。

ネパールは一四の地区ゾーンと七五地域とに区分されている。一ゾーンは四ないし九の地域からなっている。

一地域は多くの村落を包含している。一番小さな地域（人里離れ人口の希薄な地域）には少しの村落パンチャヤートしかない。そして、最も大きな地域（人口密度の濃い地域）は、一二四の村落パンチャヤートがある。

村落パンチャヤートの数は人口集中による新しいパンチャヤートの設置により増加することができる。

ただし、その数の上限は四、〇〇〇パンチャヤートと定められている。そして現在では約四、八〇〇の村落パンチャヤートが設けられている。

法的には同じレベルであるが、しかし、異った環境にあるのが都市パンチャヤートである。

カトマンドー、バクタプール、ラリトプール、ビラトナガル、ビルガニそしてネパルガニといったところは大きな都市と相関関係があり、都市パンチャート形成の最小限の人口一万人スレスレの「アーバン」が一〇以上ある。

都市パンチャートは都市会議を持たない。都市地域は最大が三〇最小が九つの異ったワードに区分される。カトマンドーは二九のワードからなり、その他の都市は次第に小さくなっている。

それぞれのワードは無記名投票による任期六年の一人のメンバーを選出する。総メンバーの三分の一は二年毎に改選される。メンバーの選出は互選であり、一人のチーフと副パンチャの任期は二年である。(改正は、上記に關して、都市パンチャートのチーフ・パンチャと副チーフ・パンチャはその任期をともに四年に延長することになった)

全メンバーの三分の一はまた、地域会議のメンバーとして選出される。

都市パンチャートの機能は村落パンチャートの機能よりもずっと複雑である。

都市パンチャートは大きな税金のベースを持っている。いろいろな面倒のかかる多くの問題をかかえている。そして、沢山の行政上のまた技術的な人材のスタッフをかかえている。

都市パンチャートは有益なしかも公共のサービスを用意し、都市改革の仕事やいろいろな発展事業をなしとげる。

このように、都市パンチャートと村落パンチャートは「草の根」でなりたち、パンチャート制度の基礎をなしている。

全ての村落パンチャートからそれぞれ一人の代表と、そして、都市パンチャートのメンバーの三分の一をもって、地域会議を構成している。

地域会議は議長として、メンバーの中から一人を選出し、その他副議長と、それに地域パンチャートを構成する九名のメンバーを選出する。

地域会議は少くとも年二回開催し、地域パンチャートの業務を検討し、新しいプログラムや原資について決定する。

地域会議はまた議長、副議長、およびメンバーを三分の二の多数決によって変更できる。

地域パンチャートは地域会議の実行機関であり、その全活動に対して責任を負わされている。

そのメンバーの任期は六年である。

地域パンチャートは地域レベルでの如何なる種類の開発事業にも計画責任をもっている。それはまた、村落パンチャートの活動を監督し調整する。そのメンバーは村落レベルの活動にたずさわり、そしてまた、地域の他の区域も巡回する。

このように、彼らは、地域パンチャートと村落パンチャートの両者の活動のリンクをつなぎつつける。

彼らは、地域パンチャートの設計、計画を助けるだけでなく、その完成を助ける。

全地域パンチャートの議長、副議長として地区グンのメンバーは地区会議を構成している。

地区会議のメンバーは一人の議長と一人の副議長を選出する。その任期は二年である。

地区会議の第一の機能は地域レベルの開発活動が、その地域において最大限の協力をうるための検討と調整で

ある。そしてまた、ナショナル・パンチャヤートのメンバーを選出することである。

七五地域（それは一四地区^{グレイ}からなっている）は九〇名のナショナル・パンチャヤートのメンバーを選出することができる。

最小限それぞれの地域で一人の代表を選出し、一五の特別議席は大きな人口をかかえている地区に割り当てられる。（これら一五名については、一九六七年一月一六日有効になる前に地区パンチャヤートで行っていたが、地域パンチャヤートの仕事と大きく重複したので取やめとなった。）

パンチャヤート・ハイアラキー（階層）の頂点にナショナル・パンチャヤートがある。

ナショナル・パンチャヤートには一二五人の代表者と次のエージェンシーがある。

一、地域パンチャヤート 九〇名のメンバー

二、階層別組織 一五名のメンバー

ネパール農民組織 四名

ネパール青年組織 四名

ネパール婦人組織 三名

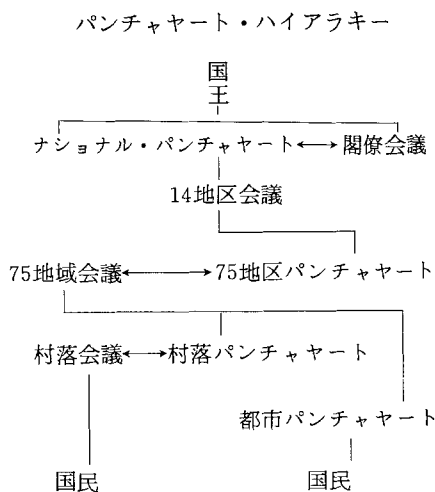
ネパールEXサービス

男子組織 二名

ネパール労働組織 二名

三、学士代表（国に登録ずみの学士から互選） 四名

計一二五名



四、国王の任命（右記の一五％）一六名

ナショナル・パンチャヤートは国の最高の立法機関である。内閣はナショナル・パンチャヤートのメンバーによって構成される。そしてそれに対応する活動がなされる。

すべての行政はナショナル・パンチャヤートを通じて行われる。どんな議案も提案もそれは国王を通して、その意を得て行われる。国王の同意があつてはじめて国の法律になる。

すべての国家経費はナショナル・パンチャヤートによって決定される。

すべての政府支出の会計検査はナショナル・パンチャヤートに提出される。

パンチャヤート・ハイアラキーは次の構造図によってしめすことができる。

本書は最初に紹介したように、ネパールのパンチャヤート・システムについて書かれている。

全体を八章に分け、一章二章では序論として、ネパールの社会的、経済的背景、ならびにその政治的遺産についてのべ、第三章で政党ならびに議会制の不適性について論じ、社会的、政治的な変化の過程で無くてはならぬものは何にかについて説明し、第五章でパンチャヤート・システムの機構、パンチャヤート・システムの基本的理念等論及している。第六章で階級制度や、職業別の組織について論じ、七

章で地域共同体の開発とパンチャートの関係を説明し、第八章で総括を試みている。今回のテーマはパンチャートではなかったので、農村調査、または農村を理解するうえで必要と思われるところだけを抄訳した。読みにくい点もあるかと思うが、実際日本語で何んと表現してよいかよく判らない術語などは、一番使い易い訳にしておいた。後日、あらためて検討のうえ、訂正すべきは訂正して、できればコピー・ライトの問題もあるので全章発表させていただく予定でいる。

※ "The Constitution of Nepal" by Tirth Raj Tuladhar 1956 Kathmandu 45。